

目的. 17世紀後半の西洋男性服飾は身体中にリボンやレースを飾り、ベチコート・ブリーチス〔仏、ラングラープ〕と呼ばれる布地を多く使用した下衣をつけ、巨大なかつらをかぶるといふ当時のバロック的好みと一致した装飾過多な装いであった。当研究は当時服飾の中心とされたフランスに比べてあまり明らかにされていない英国の服飾の特徴と、それに対する意識を考察するものである。

方法. 英国の絵画作品や服飾遺品、ピープス氏やイブリン氏の日記等を参考に社会背景を考え合わせ研究を進め、同時にフランス服飾についても調査し比較資料とした。

結果. 1. 1649年から1660年までは黒を基調とした質素なピューリタン服の着用が義務づけられたが、1660年の王制復古以後は変化に富んだバロック風服飾であるフランスモードを追うようになる。

2. しかし英国の服飾の特徴はエリザベス朝からの伝統である生地豪華さ、金・銀レース等の服飾の好みである。これはフランスのモリエールや、ラ・ブリュイエール等の文学作品中で、リボン束の多さや布地の幅についてが数多く取り上げられているのに対し、英国のピープス氏やイブリン氏の日記では主に金・銀レース等についてが多く話題にされていることからわかる。

3. もう一つの特徴として東方貿易が盛んになったことによる服飾上の東方趣味があげられる。その代表例は1660年に現れた東洋服にヒントを得た長めの上着であるVestであり、これはその後の服飾の流れを変え、紳士服の基本となっていく。